

---

# 禁断LOVE

コウユウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

禁断LOVE

### 【NZコード】

N4840Z

### 【作者名】

コウコウ

### 【あらすじ】

この話は私の実話を元に作ったお話です。

結婚している二人…

不倫から始まりいろいろな困難を越えて一人は結ばれるのか

それとも現実に戻るのか…

ちょっと大人のLOVE  
storyです

## プロローグ

愛は朝からバタバタしていた。

今日は区内掃除の日。

毎日の朝の日課である掃除・洗濯を済ませ、やつと化粧をしているところである。

旦那の大和はソファーでコーヒーを飲みながら、優雅に朝からテレビを見ていた。

「今日の掃除行かないんでしょ？」

愛はくつろいでいる大和にいちよう聞いてみたが。  
「どうして俺が行かないとダメなんだ。めんどくさい」

おもいどおりの返事が返ってきてただけだった。

この家を建てたのが5年前。

団地内の行事があるときは愛が出席している  
最初の半年ぐらいは大和が行っていたが。

一度愛が行つたきり行かないようになったのである。

「聞いたのが間違いだつたわ」

愛は大和のそんな態度に腹がたつたのか、ブツブツと呟いた。

・

それからは一人とも黙つたまま  
いつもこんな感じではあるのだが…

「桜、向日葵そろそろおきて~」

愛は化粧の手は止めずに、二階で寝ている子供達に向かつて大声で  
叫んだ。

しばらくして…

「はい、おはよ一人とも。早く用意して~」飯食べて。今日は区内掃  
除の日だから、用意できたら行くよ」

桜と向日葵は、愛が機嫌悪いのを察したのか黙つたまま用意を始め  
た。

「出かけてくるぞ」

大和は急に立ち上がり、そろいにながらリビングから出ていったの  
である。

休日でも大和は一人行動が当たりまえであった。

愛も子供達もそんな休日に慣れているせいか

大和が出ていくことに、なんの違和感もなかつた。

愛と大和は結婚して12年になるが、夫婦の会話もなく、休日も別  
行動がほとんどだった。

「用意できたらこいつか

愛は子供達が用意できたのを確認したのか、ソファーから立ち上が  
り玄関へ向かつた。桜と向日葵も不機嫌な顔で愛に続いた。

区内掃除の集合場所の公園までは家から歩いて5分ほどである。公園に着くともうかなりの人が集まっていた。区内の決まりで不参加の家は5・000円罰金であるため、ほとんどの家が参加している。小学生は子供会があつて全員参加になつているため、かなりの人数である。

季節は2月初め。今日も雪が降りそうな曇り空である。

桜と向日葵は友達を見つけたのか、走つていった。

愛は一人になり震える腕をさすりながら立つていると、後ろから肩をたたかれた。

「おはよ」

愛が急に肩をたたかれたのでビッククリして振り返ると、茜が笑顔で立つていた。

茜は愛と同じ会社に行つている同僚である。

家は近所で子供もよく似た歳である。

愛と性格が合はせこむか、よく遊んだりしている。

「おはよう茜。 今日も寒いよな」

「ほんと毎日寒いよな。 どうしてこんな寒いのに掃除なんてしないとだめなんだわうね。 自分の家も掃除してないのに」

「茜の家はほんと汚いよな。 ちよつとは掃除しなよ。」

愛は綺麗好き、対して茜は掃除が苦手なのである。

「愛の家が綺麗すぎるんだよ。私も掃除してるんだからね。」

茜は苦笑いを浮かべてくる。

「ああ～茜はいろいろなことに物をおさめなんだよ。おひと見てもことじり片付けないと」

「だつて見えるといひにあつたほつがほしことをこすり見てかるでしょ。片付けちやつたら絶対どこにしまつたかわからなによ」

茜は一人でうなずいて納得していた。

愛はそんな茜を見て呆れてくる。

「家事なんて真剣にやつても得にならないでしょ。旦那も子供も私がやるのが当たり前だと思つてゐしれ」

茜の言つてゐることは確かに当たつてある。  
愛は自分が汚いのが嫌だから掃除や片付けはやつているが、毎日「飯作つて洗濯して・・・。  
子供は仕方ないとしても、旦那はそれが当たり前だと思つてゐる  
が腹が立つ。

「男つてほんと嫌な生き物だよね

「ほんとだよ。付き合つてるとおはめちやくちや優しかったのよ。結婚したらまつたく何もしない。ほんと心がしてほしこよあの男だけわ。」

愛と茜は合つたびにこんな話をしている。

旦那の文句に關しては同感なのである。

茜も結婚して10年である。

愛の旦那と同様、家のことは何一つしてくれない。

「世の中の男つてみんなおんなじなんだろうかなー。家のことは何もしない。仕事して疲れてるのなんて一緒にない。」

「ほんとだよね。自分が仕事してなかつたらまだ我慢できるけど…自分だけ仕事頑張ってるみたいな態度とるから余計に、腹が立つんだよね。」「愛も茜も思つてこることと一緒にやりたいなずいてい。

「茜は癒しのダーリングがいるでしょ」

愛はそんな同じようにうなずいている茜を見てひょいと怒った顔でそう言つた。

「まあ～ね～。隆雄は今の私をほんとに癒してくれるよ

茜は急に嬉しくなったのか笑顔にかわった。

茜は旦那とは別に付き合つてる人がいるのだ。世間的にこう不倫だ。

「こ～よなー茜は、そういう人いるから。私も探そうかな～」

「そうしなよ。前の彼氏は良かつたでしょ」

愛も数ヶ月前までは癒しの彼氏がいたのだ。相手は独身者であつたため、いつでも会うことができたし、何も気を使うことがなかつた。

茜のほうは、既婚者ではあるが単身赴任をしているため独身者と対してかわらない。

「独り身は楽だけど、ずっと一緒にいるには入れないからね。やっぱり次は結婚している人がいいな」

不倫といつもの一線を越えてしまつと大変なことになつてしまつ。愛の彼氏はそんなことを恐れたのか、ややこしくなる前に別れを告げたのであつた。

最初は気晴らし程度の付き合ひだつた愛ではあつたが、一緒にいるとやっぱり感情がでてくるものである。彼氏はそんな愛の気持ちを察したのであらう。

「茜はどうなのー? 隆雄とは? あくやつてるの?」

愛は自分の過去を振り返り返りちょっと悲しい気分になつた。

「いい感じだよ。隆雄は家で一人だからいつでも会いに行けるし。嫁とも全然連絡とつてないみたいだし」

「そりなんだ。いいよなやつぱり単身赴任は。どちらも結婚してたら先のことなんて考えなくていいんだもんね」

「そんなこともないよ。やつぱりずっと一緒にいると好きになつていくし、私のほうは旦那が近くにいるからね。あんまり下手なことしてばれちゃつたら大変だしね」

茜はさつきの笑顔が嘘のように急に寂しい顔に変わつた。

「でもばれなかつたらずっと一緒にいるじゃんか

「そりなんだけど。ずっと一緒にいれても結婚できるわけでもないでしょ。だから辛い」ともつぱいあるよ。最近はつちの旦那にも怪しまれてるしね。」

「ばれないように気をつけなよ」

「そうだね……」

二人がいつものように話し込んでいる間に周りの人達が集まり始めた。

「あ～掃除めんどくさいね」

「早く終わらして帰るわよ」

一人は掃除が相当嫌なようで嫌な顔をしながら集まっている中に入つていった。

「おはよう」や「おはよー」

愛の職場は製造業の事務である。

向日葵が保育園に入つてからいろいろな仕事をしている。  
今の仕事はちょうど2年になった。

茜は愛より3カ月ほど後に入ってきた。

二人とも旦那の扶養に入っているのでパートはあるが。

「おはよー」

愛想のない返事が帰つてきた。

職場の課長である小山だ。

もうすぐ定年間近のクソ親父。

ろくに仕事もできないくせに、口だけは偉そつであるためみんなに嫌われている。

本人はまったく気づいていないのだろうが。

愛が自分のデスクに座り、仕事の用意をしているとバタバタと茜が事務所に入ってきた。

「山本さん、もう少し早くこれないのかなあ」

小山が茜に向かつてブツブツ言つている。

「おはよー愛」

茜は愛の隣である。

「おはよう茜。小山がブツブツ言つているよ」

愛は小山と茜を交互に見ながら笑つている。

「え～なんか言つてた？全然聞いてないよ。まつ、聞く気もないけどね」

茜はあっけらかんとしているだけだ。

「そんなことはどうでもいいけど…昨日はほんとめんべくかかったよね。」

茜はもう小山のことなんて気にしていない。まつたぐいの性格である。

「せうだね。寒かったしね。」

「ね～愛さ～。今週の土曜空いてる…？」

「別に家でいるだけだけど、どうしたの？」

「前の会社の飲み会に誘われたんだけど、一人で行くの嫌だから一緒に行つてくれないかなって思つて」

「え～、私知らない人ばかりじゃん。」

「みんな同年代の人ばかりだよ。ついでに彩夏も誘つてるから。彩夏は同僚で一人とは仲がいい。」

「彩夏は彼氏探してるといだから喜んでたよ。愛もいい機会じゃん。いい彼氏いるかもよ。」

茜は一人ではしゃいでいる。

「どんな人が来るの？」

「独り身もいるし、結婚してる人もいるよ」

「そ、うなんだ。まあ、気晴らしに行こうかな」  
愛はあまり行く気にはなれなかつたが、最近嫌なことだらけだつた  
こともあり行くことにした。

「良かった。じゃ、楽しみにしててね」

「そ、こ、二、人、もう仕事始まつてるんだぞ。しゃべつてないで仕事仕  
事。」

小山が叫んでいる。

「あ、馬鹿が怒つてるわ。仕事しよ」

茜は小山のほうをちらりと見て、すぐに愛に向かって舌をだして笑  
つた。

「あ、仕事めんどくさいね」

愛と茜は、テスクに向かつて仕事を開始した。

その日の昼休み

愛と茜は、食堂で彩夏と一緒に昼を食べていた。

こここの食堂は、なかなか美味しくて安いため、会社でも人気である。

3人でランチを食べていると、目の前に男性が2人立っていた。

「うー、いいかなー」

茜の彼氏の隆雄だった。

「あー、松下さん。どうぞ」

茜が微妙な笑みを浮かべながら隆雄を見ている。

「どうも、山本さん」

隆雄もそんな茜を見ながら、微妙な笑いを浮かべている。

会社内では、いろんな人の目があるので普通に接しているのである。もちろん愛は知っているが、一緒にいる彩夏はまだ2人の関係を知らない。そして隆雄と一緒にいる男性、隆雄の部下の平下 徹も2人の関係は知らないのである。

愛と茜は、今の事務をする前に隆雄が所属する製造ラインで働いていた。

そのときに2人は意気投合したらしい。  
愛も隆雄とは仲がいい。

「松下さん、そつちは忙しい？」

愛は2人のぎこちない行動を察したのか、隆雄に喋りかけた。

「…お、おう…最近は結構忙しくてな。」

隆雄は動搖をかくしながら答えたが、ぎこちない喋り方になってしまった。

「どうしたんですか？松下さん。美人3人目の前にして動搖してるんですか？」

そんなぎこちない隆雄を見て、隣でいた徹がすかさず聞いてきた。

「私があまりにもかわいいからだよね」

愛がそんな隆雄と徹に向かって、笑いながらちょっととぶりつ子して

みた。

「あ～気持ち悪いからやめて」  
その返答は早かった。隆雄である。  
愛と隆雄はいつもこんな感じである。  
みんなそんな2人を見ながら笑っている。

「そんなことないですよ。愛さんかわいいですよ」  
徹は独身者なのだが、結婚している愛に対して想いをよせているのである。そんな徹の気持ちは、誰にでもわかるぐらうにじみ出ている。

「ありがと、徹君。そんなこと言つてくれるの徹君だけだよ」  
愛もそんな徹の気持ちは薄々感じていた。  
直接は徹に言われたことはないが、みんなわかつているため話のネタにされる。

「お前はほんと愛のことになつたら突つかつてくるよな」

「そんなことないですよ。だつて愛さんほんとに綺麗なんですから」

徹は少し顔を赤らめながら手を必死に振つている。

「徹さん私はどうですか？」  
彩夏だ。

「彩夏ちゃんもかわいいよね。若いつていいよね」

愛と茜は現在32歳。彩夏は28歳である。

徹は34歳。隆雄は徹よりも上で36歳である。

「徹さんは年下好きですか？6歳離れてても問題ないですか？」

彩夏はビビりなく徹を誘つているよつて見える。

「やつぱり俺は年上よつ年下だね。でもあんまつ年離れてもな～」

「え～6歳下はだめですか～」

彩夏は可愛く振る舞つてゐる。

「そんなことはないよ」

徹はちよつと困つた顔をしてゐる。

そんな2人の会話を聞いてゐるのは愛だけ。

2人が話で盛り上がつてゐる横で、ちゃつかり横に座つてゐる隆雄と茜は、小さな声で何か話してゐた。

彩夏と徹はまつたく気づいていなかつたが、愛はそんな二口二口しながらいぢやつてゐる二人を見逃していなかつた。

そんなことをしてゐる間に、仕事10分前のベルがなつた。

「あ～もう休憩終わりじゃ～ん」

彩夏が時計を見ながら残念そうにしてゐる。

「ああ～今日も後半日頑張ろうか～」

隆雄が立ち上がりガツツポーズを決めた。

「なんでガツツポーズなの～」

愛と茜が、隆雄の意味不明な行動に笑つてゐた。

「ま～いいじゃん、いいじゃん」

隆雄は自分でも何をやつてゐるのかわからなくなつたのか、戸惑つてゐる。

「さつ、戻ろつ」

愛と茜は立ち上がり、隆雄に手を降りながら食堂を後にした。  
隆雄と徹、彩夏も食堂にもう人があまりいないことに気付き小走り  
で食堂を出ていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4840z/>

---

禁断LOVE

2011年12月26日21時53分発行